

連行荷重を受ける梁の動的挙動について

山口大学 正員 會田 忠義
 " 学生員 小松茂生
 広島市 奥野泰規
 北九州市 横矢順二

まえがき ある一定の間隔を保ちつつ、ある速度で荷重が梁上を走行する場合、梁の運動方程式は Hill 型の方程式になる。¹⁾ Hill 型の方程式は安定解と不安定解を持つことが知られている。本研究は運動方程式より Hill 型の擾乱方程式を求め、不安定現象、すなわち、時間の経過とともに振動変位が増大する不安定振動を起す荷重条件を Balotin の方法²⁾により求め、無次元パラメータ平面で明らかにしようとするものである。

擾乱方程式 荷重間隔 a 、走行速度 V で、集中荷重 $P \cos \omega t$ (ω : 荷重振動数, P : 荷重振幅, P は半軸の正方向が正) が、スパン l の梁上を連続移動するとき、運動方程式は次式で表わされる¹⁾。

$$(A + A_M(t)) \ddot{f} + (B + PC(t)) \dot{f} + d = 0 \quad (1)$$

ここで、 $A_M(t)$ と $C(t)$ は周期 $T = \frac{a}{V}$ をもつ。

連行荷重を受けて定常振動(定常振動解をもつ)している状態に、小さい擾乱(\bar{f})を与えると、運動方程式は式(2)となる。

$$(A + A_M(t))(\ddot{f} + \ddot{\bar{f}}) + (B + PC(t))(\dot{f} + \dot{\bar{f}}) + d = 0 \quad (2)$$

したがって、式(1)を考慮すると、次の擾乱方程式が得られる。

$$(A + A_M(t)) \ddot{f} + (B + PC(t)) \dot{f} = 0 \quad (3)$$

式(3)は $(A + A_M(t))^T (B + PC(t))$ と同じように、周期 $T = \frac{a}{V}$ をもつことから Hill 方程式に相当する。

$A_M(t)$ と $C(t)$ が周期 $T = \frac{a}{V}$ をもつので、それらを Fourier 級数で展開する。

$$A_M(t) = A_0 + \sum_{p=1}^{\infty} (A_{1p} \cos p\omega t + A_{2p} \sin p\omega t) \quad := 2, \quad \omega_0 = 2\pi a/V \quad (\text{荷重移動振動数})$$

$$C(t) = C_0 + \sum_{p=1}^{\infty} (C_{1p} \cos p\omega t + C_{2p} \sin p\omega t) \quad (4) \quad \omega = \alpha \omega_0, \quad \alpha: \text{整数} \text{ とする}.$$

擾乱方程式は次とある。

$$\left[A + \left\{ A_0 + \sum_{p=1}^{\infty} (A_{1p} \cos p\omega t + A_{2p} \sin p\omega t) \right\} \right] \ddot{f} + [B + P \{ C_0 + \sum_{p=1}^{\infty} (C_{1p} \cos p\omega t + C_{2p} \sin p\omega t) \}] \dot{f} = 0 \quad (5)$$

境界振動数方程式 Hill 型方程式の解について、周期系数 C の周期と同じく、あるいは、2倍の周期をもつ周期解がパラメータ平面において、安定領域と不安定領域を区別する。より厳密にいふと、同じ周期をもつ二つの解が不安定領域を区分し、異なる周期をもつ解が安定領域を区分するといふことが知られて²⁾いる。

C と A_M が周期 $T = \frac{a}{V}$ をもつので、周期 $2T$ をもつ周期解を式(6)で表わす。

$$\ddot{f} = \sum_{s=1,3,5}^{\infty} (a_s \cos \frac{s\pi}{2} \omega t + b_s \sin \frac{s\pi}{2} \omega t) \quad (6), \quad a_s \text{ と } b_s \text{ は時間に無関係なベクトルである}.$$

上式を擾乱方程式(5)に代入し、諧和パラニス法を適用すると、 a_s と b_s を求めるための同次方程式が得られる。これより、 a_s と b_s が存在するための条件、すなわち、次式の境界振動数方程式が得られる。

$$\left| -\frac{W_0^2}{4} ([A]_1 + \frac{1}{2} [A_M]_1) + [B]_1 + \frac{1}{2} P [C]_1 \right| = 0 \quad (7)$$

ここで、

$$[A]_1 = \begin{pmatrix} 3^2 A & & & \\ & 1^2 A & & \\ & & 1^2 A & \\ & & & 3^2 A \end{pmatrix}, \quad [A_M]_1 = \begin{pmatrix} -3^2(2A_0 + A_{13}), 1^2(A_{11} + A_{12}), 1^2(A_{22} - A_{21}), 3^2 A_{23} & \dots \\ -3^2(A_{11} + A_{12}), 1^2(2A_0 + A_{11}), 1^2 A_{21}, 3^2(A_{12} + A_{21}) & \dots \\ -3^2(A_{22} - A_{21}), 1^2 A_{21}, 1^2(2A_0 - A_{11}), 3^2(A_{11} - A_{12}) & \dots \\ \dots, 3^2 A_{23}, 1^2(A_{22} + A_{21}), 1^2(A_{11} - A_{12}), 3^2(2A_0 - A_{13}) & \dots \end{pmatrix}$$

$$[\mathbf{B}]_1 = \begin{pmatrix} B \\ B \\ B \\ B \end{pmatrix}, [\mathbf{C}]_1 = \begin{pmatrix} -(2C_0 + C_{12}), (C_{11} + C_{12}), (C_{22} - C_{11}), C_{23}, \dots \\ \dots (C_{11} + C_{12}), (2C_0 + C_{11}), C_{21}, (C_{22} + C_{11}), \dots \\ \dots (C_{22} - C_{11}), C_{21}, (2C_0 - C_{11}), (C_{11} - C_{12}), \dots \\ \dots C_{23}, (C_{22} + C_{11}), (C_{11} - C_{12}), (2C_0 - C_{11}), \dots \end{pmatrix}$$

一方、周期 T をもつ周期解を式(8)で表す。

$$\ddot{\theta} = \frac{1}{2}\theta_0 + \sum_{S=2,4,6} (A_5 \cos \frac{1}{2}S\omega t + B_5 \sin \frac{1}{2}S\omega t). \quad (8), \quad \theta_0 \text{ は時間 } t=0 \text{ における初期条件}.$$

上式と式(5)に代入し、調和バランス法を適用すると、 A_0, A_5 および B_5 を求める同次方程式が得られる。これより、次の境界振動数方程式が得られる。

$$\left| -\frac{W_0^2}{4} ([\mathbf{A}]_2 + \frac{1}{2}[\mathbf{A}_M]_2) + [\mathbf{B}]_2 + \frac{1}{2}P[\mathbf{C}]_2 \right| = 0 \quad \dots (9)$$

$S=2$,

$$[\mathbf{A}]_2 = \begin{pmatrix} 4^2 A \\ 2^2 A \\ 0 \\ 2^2 A \\ 4^2 A \end{pmatrix}, [\mathbf{A}_M]_2 = \begin{pmatrix} -4^2(2A_0 + A_{12}), 2^2(A_{11} + A_{12}) \\ -4^2(A_{11} + A_{12}), 2^2(2A_0 + A_{12}) \\ 4^2 A_{12}, 2^2 A_{11} \\ -4^2(A_{23} - A_{21}), 2^2 A_{22} \\ -4^2 A_{24}, 2^2(A_{23} + A_{21}) \end{pmatrix} \quad \dots$$

$$[\mathbf{B}]_2 = \begin{pmatrix} B \\ B \\ \frac{1}{2}B \\ B \\ B \end{pmatrix}, [\mathbf{C}]_2 = \begin{pmatrix} -(2C_0 + C_{12}), (C_{11} + C_{12}), C_{12}, (C_{23} - C_{21}), C_{24}, \dots \\ \dots (C_{11} + C_{12}), (2C_0 + C_{11}), C_{11}, C_{22}, (C_{23} + C_{21}), \dots \\ \dots C_{12}, C_{11}, C_0, C_{21}, C_{22}, \dots \\ \dots (C_{23} - C_{21}), C_{22}, C_{21}, (2C_0 - C_{12}), (C_{11} - C_{12}), \dots \\ \dots C_{24}, (C_{23} + C_{21}), C_{22}, (C_{11} - C_0), (2C_0 - C_{11}), \dots \end{pmatrix}$$

式(7)と(9)より、結合共振を除く係数励振不安定領域の境界にあり W_0 と P の関係が求められる。

解析例 π 断面ばかりの不安定領域の算出結果を以下に示す。図中、縦軸は荷重移動振動数 W_0 と平均荷重 (Fourier級数の初項 C_0, A_0) 作用時の梁の固有振動数 ω_0 で割った無次元量を、横軸は無次元荷重 $P_* = P / \{E I_0 (\pi/2)^4 + G K (\pi/2)^2\}$ を取る。数値計算によって、曲げのみのねじりの振動変位は 1 次モードのみを用ひ、周期解(6)は 2 項 ($S=1, 3$)、周期解(8)は 3 項 ($S=2, 4$) までを取り近似計算を行なう。Fig. 1 は P_* の $\delta = 9\% = 1.05$ の状態で作用したときの不安定領域を、Fig. 2 は P_* 一定外、Fig. 3 は 1 次モードの荷重が質量比も場合の領域を示す。

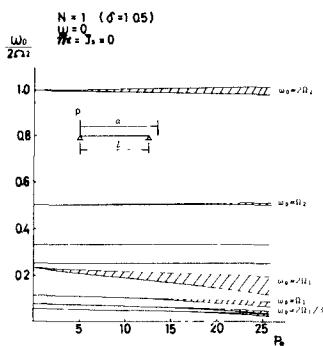


Fig. 1

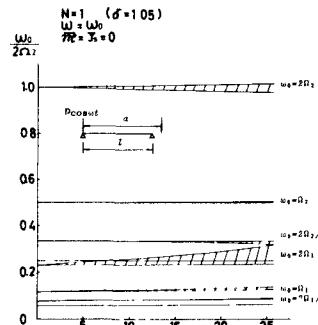


Fig. 2

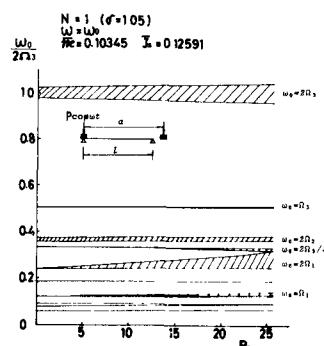


Fig. 3

- 1) 會田・小松・三浦：従動走行荷重を受けた梁の動的挙動について、工学会中四国支部昭和56年度、学術講演会
- 2) ホローナー：弾性系の動的安定（近藤、中田訳）、コロナ社、P.15、昭和46年。